西アフリカ・イスラーム研究の新潮流

――教団、思想、言説的伝統

中尾　世治 *1　池邉　智基 *2
末野　孝典 *3　平山　草太 *4

本稿では、2000 年代以降の西アフリカ・イスラーム研究の紹介と新たな方向性の提示を目的とする。まず、2000 年代以降の新潮流を概観し、そのうえで、著しい発展を遂げている領域――西アフリカのイスラーム神秘主義教団研究、アラビア語の文書を用いた歴史学・イスラーム思想史研究、言説的伝統概念をめぐるイスラームの人類学の理論研究――を個別にレビューする。全体としては、2000 年代初頭に 1990 年代までの成果を統合した研究が生じ、2000 年代後半以降、人類学を中心とした研究では、イスラーム教育や公共性などが研究の主題となっていった。他方で、歴史学・イスラーム思想史研究では、アラビア語文献を広範に用いた研究が出現するようになった。こうした研究の進展によって、個別化が進む一方で、統合的ないしは複合的な研究の方向性が示された。一方では、言説的伝統概念を、エスノメソドロジーなどを介して批判的に再構築していく方向性、他方では、人類学、言語学、歴史学、イスラーム思想史研究などによる学際研究の方向性が提示された。

KeyWords

西アフリカ
イスラーム
イスラームの人類学
言説的伝統
アジャミー

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　1990 年代までの西アフリカ・イスラーム研究の達成と新展開
Ⅲ　西アフリカのスーフィー教団研究
Ⅳ　アラビア語資料群を用いた歴史学・イスラーム思想史研究
Ⅴ　イスラームの人類学の理論的展開
Ⅵ　結論

Ⅰ　はじめに

2000年代以降、グローバルにみて、西アフリカのイスラームを対象とした研究が増加している。それにともなって、研究テーマも変化し、研究トピックごとの内容もより深まり、それらを俯瞰する理論への関心も高まっている。これまで英仏語圏を含めて、これらの研究を包括するレビューはなされていない一方で、あまりに急増する研究のすべてをここで取りあげることは困難である。したがって、ここではいくつかのポイントに絞って、西アフリカ・イスラーム研究の新潮流をレビューし、それらから新たな研究の方向性を示す[1]。

まず、IIでは西アフリカ・イスラーム研究の概観を示す。具体的には、2000年代以前の研究の達成を述べ、それ以降の主要な研究テーマとそれらの研究を示し、新たに増加したアラビア語史料に基づく代表的なモノグラフを紹介する。IIIとIVでは、主要な研究トピックとして、それぞれイスラーム神秘主義教団（以下、スーフィー教団）研究とアラビア語資料を用いた歴史学・イスラーム思想史研究をレビューする。そのうえで、Vでは、理論研究として、西アフリカ・イスラーム研究に大きな影響を与えた言説的伝統概念をめぐる研究のレビューを行う[2]。

Ⅱ　1990年代までの西アフリカ・イスラーム研究の達成と新展開

2000年代初期の研究は、1950年代からの半世紀にわたる西アフリカでのアラビア語の写本や口頭伝承の収集、植民地統治期の歴史研究を土台として、その統合的な成果があらわれた時期であった。

1990年代までの研究をまとめたものとしては、『アフリカにおけるイスラーム史』（Levtzion and Pouwels (eds.) 2000）があげられる。この書は、アフリカ全体を対象として、起源から現在までをカバーし、各テーマ別の章を配したという点で、画期的なものであった。また、2000年代初期には、イスラーム史研究の統合による新たな全体像が示された。

植民地統治以前のイスラーム史研究では、ジハード研究とムスリム長距離交易商人研究の統合がなされた。坂井によるマリのジャのアルファ・ボアリ・カラベンタ（Alfa Boari Karabenta）の研究では、長距離交易を担ってきた「平和主義的な」マンデ系ムスリムが、消極的にジハードに関与しただけでなく、伝統的に非ムスリムとされた民族や女性への教育を行うという改革を行ってきたことを明らかにしている（Sakaï 1994; 坂井 2003）。

植民地統治期のイスラーム研究の成果をまとめたものとしては、ローネイとソアレス（Launay and Soares 1999）とブレンナー（Brenner 2001）が代表的である。ローネイとソアレスは、植民地統治期に弾圧をうけたハマウィー教団とイスラーム改革主義運動を取りあげ、植民地の政治経済の状況下で、民族、親族、「カースト」、奴隷出身といった特定の社会的なカテゴリーを横断したムスリムという社会的なカテゴリーが出現し、植民地国家やポスト植民地国家から概念的に離れた「イスラームの領域」が出現したとしている（Launay and Soares 1999）。この論文は、過度の単純化や事実誤認を含んでいるが[3]、イスラームと政治の関係を論じる研究に広く引用されることになった。

ブレンナーの研究は、仏領スーダン（現在のマリ共和国）の

*1 総合地球環境学研究所
*2 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
*3 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
*4 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1　本稿は、地域とテーマの2点で限定的なものとなっている。地域的な限定性としては、英語圏だけではなく、著者らの調査地である仏語圏においてもセネガル、マリ、ブルキナファソ、カメルーン以外の研究はほとんど言及することができなかった。特に、ナイジェリアを対象とした研究はそれだけでも個別のレビューを必要としている。また、テーマとしては、ジェンダー研究が抜け落ちている。この点と部分的に重なるが、国際的な人権概念とローカルなムスリムの実践との関係についての研究もまったくあつかうことができなかった。このほか、近年、欧米へのムスリム移民や安全保障研究による「イスラーム・テロ組織」の研究のレビューも必要とされている。さらにいえば、紙数の都合から本稿で取りあげた個別の論点でも研究を網羅できておらず、日本語で書かれた多くの研究にも言及できなかった。そのため、本稿はあくまでも、近年の西アフリカ・イスラーム研究の総体を整理・分析し、独自の研究を進めていくための端緒である。

2　本稿は、本特集におさめられた「文献学的研究と民族誌学的研究の結合と乖離――1990年代までの西アフリカ・イスラーム研究の変遷」を踏まえて書かれている。あわせて参照されたい。

3　たとえば、18世紀以降のジハードやそれにともなう社会変動によって、19世紀にはすでにムスリムは、世襲の宗教職能集団に限定されていなかった。アルファ・ボアリ・カラベンタの改革（Sakaï 1994）などは、イスラームを特定の人びとに限定することを打破しようとする運動であった。本特集の「言説的伝統と文字言語の社会的布置――20世紀半ばの仏領西アフリカにおけるボボ・ジュラソのメデルサ設立運動の断絶と連続」を参照。

イスラーム改革主義運動の盛衰を行政文書から系統立ててまとめ、理論的な視座を示したという点で画期的なものとなった（Brenner 2001）。ブレンナーは植民地統治以前のイスラーム神秘主義による秘儀的な知から、近代学校による開かれた開発のための知へと、エピステーメー（知の再生産を方向づける認識枠組み）の変化が生じたと論じた。そこでは、イスラーム教育の近代化を図る運動は教育をめぐるヘゲモニー闘争であり、マドラサ建設の動きは「下からの」政治として位置づけられる。

ローネイとソアレス、ブレンナーの研究を踏まえた西アフリカ・イスラーム研究は、2000 年以降、主として人類学者によって展開された。これらに共通する研究テーマは公共性という概念でまとめられる。

代表的な研究は、マリのニョロにおけるムスリムの諸集団を対象としたソアレスによるモノグラフである（Soares 2005）。ソアレスは、ティジャーニー教団とそこから分かれたハマウィー教団の中心地であるニョロにおいて、教団のヒエラルキーに基づくカリスマを前提として、祝福をさずける少数のムスリムがスーフィー教団の秘儀的な知識を独占していることを示し、こうした教団のあり方は植民地統治期に形成されてきたと論じている。独立後には、ニョロでは、イスラーム改革主義の言説に対抗する保守派とムスリムの秘儀的な活動を批判する革新派が出現した。ソアレスは、保守派と革新派のそれぞれの立場は正反対であるが、いずれも教団のヒエラルキーに依拠した権威を利用していることを指摘し、公的な言説空間での両者の拮抗関係を論じている。公的な言説空間でのせめぎあいを論じていたという点で、ソアレスは公共性という研究テーマにいち早く先鞭をつけたといえる。

その後、このソアレスの模範的なモノグラフのように、歴史的な変化と政治経済状況を踏まえた、イスラームの公共性を明示的に論じる研究が増加する（たとえば、Soares and Otayek (eds.) 2007; Holder (éd.) 2009; Holder et Sow (éds.) 2014）。それらの研究では、植民地統治期からの歴史的な拘束性とグローバルなイスラーム改革主義の言説、同時代の政治経済状況の変化を踏まえて、現在の西アフリカにおいて、「よきムスリムであること」はいかなることであり、それが公的な問題にいかにかかわるのかに焦点があてられた[4]。

そのなかから、近年、イスラーム改革主義運動から派生して出現したムスリム NGO が新たな研究対象として浮上してきている。カナダのラヴァル大学を中心とした研究者らによるブルキナファソとコートディヴォワールにおけるキリスト教とイスラームの信仰に基づく NGO（faith-based NGO）を対象とした研究である（たとえば、Gomez-Perez, LeBlanc and Savadogo 2009; LeBlanc and Gosselin (eds.) 2016）。これらの研究においては、1980 年代の構造調整以降の両国で、教育や公衆衛生などといった領域への国家予算の配分が大きく削減され、信仰に基づく NGO を含む多くの NGO がそれらの公的領域に参入するようになったことが明らかにされた。しかし、年を経るにつれ、NGO 間の生き残り競争も激しくなり、信仰に基づく NGO の職員の団体への帰属意識が薄れ、こうした NGO への参加をよりよい条件の転職のステップとして捉えるムスリムなどの現状が記述されている。

また、ムスリムとメディアのかかわりについての研究も、公共性研究の一部に含めることができるだろう。これらの研究は主として、メディアの普及が思想の伝播と実践の変化に与えた影響を論じている（Launay 1997; Schulz 2012）。加えて、ナイジェリア北部のイスラーム改革主義運動の展開[5]において、タフスィール[6]のラジオ放送が果たした役割についての研究も進展しつつある（Brigaglia 2007; Larkin 2015）。他方で、同じくナイジェリアやマリにおけるカセットテープや書籍によるイスラーム的言説の流通状況を対象とした研究（Zappa 2009, 2015; Philips 2013）などもある。なかでもザッパの研究では、メディアの流通がそのまま言説の流通を意味するわけではないという事例が示されるなど、メディアと言説の関係の複雑さが検討されている。

また、イスラーム教育の研究も大きく活性化している（たとえば、Ware 2014; Launay (ed.) 2016）。そもそも、西アフリカにおけるイスラーム改革主義運動がイスラーム教育の近代化を目的としたものであったため（Brenner 2001; 中尾 2016）、1980 年代以降のイスラーム改革主義運動研究は、大なり小

4　たとえば、セネガルの近代的な高等教育をうけた若いムスリムたちの宗教的な活動についての阿毛による研究が、このような研究の具体例となるだろう（Amo 2018）。

5　ナイジェリア北部において、イスラームの正統性をめぐる闘争を展開してきた諸運動の歴史については、ボコ・ハラム研究まで含めると、非常に多くの研究蓄積がある（たとえば、Umar 1993; Loimeier 1997, 2012; Kane 2003; Anonymous 2012; Brigaglia 2012; 坂井 2015, 2017; Thurston 2016）。やや論点が外れるが、イスラームとテロとの関係は、安全保障分野や政治学のなかで論じられている（島田 2014; Harmon 2014; 佐藤 2017）。

6　タフスィールとは、ムスリムたちが神の意図を理解するために、イスラーム知識人がクルアーンの章句の意味を解釈し、注釈を付したものである。

なりイスラーム教育について論じてきていた。そうした研究に大きく転換をもたらしたのは、ウェアによる『歩くクルアーン——西アフリカにおける、イスラーム教育、身体化された知と歴史』(Ware 2014)である。ウェアは、クルアーン学校[7]における教育を子どもの搾取の温床や「遅れた」教育とみなす、第二次世界大戦以降に拡大したグローバルな言説やイスラーム改革主義運動の言説に対抗して、それらは古くからあるイスラームの正統な教育であり、口承による記憶を前提とした知の身体化としてあることを主張した[8]。歴史的な記述や改革主義の捉え方については疑義が示されているものの(Seesemann 2015)、本書はクルアーン学校の教育の価値を正面から主張し、その重要性を示した点で、近年の西アフリカ・イスラーム研究におけるひとつの画期をなす民族誌として位置づけられるだろう。

イスラーム改革主義運動研究の進展とともに、西アフリカ各地のイスラーム教育改革の歴史的な経緯については多くの研究がなされてきた(たとえば、Loimeier 1998; Kobo 2012)。しかし、こうした研究では、史資料の限定性から、ラヴァル大学のサンテールらのカメルーンにおける独立後のイスラーム教育の報告を除けば(Santerre 1973; Genest et Santerre 1974; Adama 1999)、教育の実態はほとんど明らかにされていない。

このような点で、タマリの研究は貴重なものとなっている(Tamari 2002, 2009, 2018)。マリのクルアーン学校では、クルアーンを、現地語とアラビア語とを単語レベルで対応させて教えるのではなく、意味のまとまりごとに翻訳して教えている一方で、メデルサでは、意味のまとまりごとに翻訳して教えるような伝統的な教育法が抜け落ちていることが指摘されている(Tamari 2009)。こうした研究は、イスラームのイディオムがアフリカ諸語のなかでいかに翻訳されてきたのかという問いをもとに展開している(Tamari and Bondarev 2013)。また、こうした研究のなかで、カメルーン北部のマルアのクルアーン学校におけるアラビア語からフルベ語への翻訳の詳細を記述した江口一久の研究が(Eguchi 1975)、再評価されていることも付け加えておく必要があるだろう[9]。

最後に、2000年代後半以降、それまでの研究の質と量をともに凌駕する、アラビア語やアジャミーの文書を本格的に用いた研究が急増したことを強調しなければならない。これらの詳細についてはIVで後述するため、ここではモノグラフを中心に全体としての概観を示しておこう。

経済史研究では、ライドンが19世紀のサハラ越え交易の実態について、口頭伝承とアラビア語文書を組み合わせて論じている(Lydon 2009)。また、イスラーム思想史と部分的に重なっているが、植民地統治以前と以後の人種概念の接続を論じたホールは、「黒人」という人種的なカテゴリーをめぐる17世紀以降の言説を、アラビア語の文書とフランス語の行政文書をともに用いて明らかにしている(Hall 2011)。

イスラーム思想史研究では、スーフィー教団やその代表的な思想家の研究がなされている。ニヤセン教団については、イブラーヒーム・ニヤース(Ibrāhīm Niasse, 1975年没)の生涯と教団の展開を読みといたゼーゼマン(Seesemann 2011)と、ニヤセン教団内部のコミュニティの構成原理を論じたライト(Wright 2015a)が代表的である。苅谷はより広い視座から、アマドゥ・バンバ(Amadou Bamba/ Aḥmad Bamba, 1927年没)の著作を起点として、膨大なアラビア語文書の読解によって、単一の教団に限定されない、西アフリカのイスラーム思想の広大な宗教的・知的連関網を浮かび上がらせている(苅谷 2012)。このほかアフメドが、中東・北アフリカのイスラームの近代教育に直接・間接的に影響をうけたイスラーム改革主義運動とは異なって、直接的にマッカやマディーナで学び、サラフィー主義思想を導入したトンブクトゥ周辺のウラマーの存在を明らかにしている(Ahmed 2015)。これらの研究はいずれも、それ以前には本格的な研究の対象となっていなかったアラビア語史料を用いることで、従来の研究とはまったく異なる視座を提供している。

また、近年、アラビア語文書を広範に用いて、西アフリカ・イスラーム史を概観する研究があらわれている。ゴメスによる『アフリカの統治——初期・中世の西アフリカにおける帝国の新しい歴史』(Gomez 2018)とカンによる『トンブクトゥを越えて——西アフリカ・ムスリムの思想史』(Kane 2016)である。ゴメスは、口頭伝承、旅行記、地理誌、年代記などの多岐にわたる一次資料を用いながら、前近代における西アフリカの諸帝国の形成過程を世界史的変容の一部として捉えなおし、西アフリカの政治的・社会的変化を描きだしている

7　クルアーンの暗唱に重点をおく、イスラームの伝統的教育を行う学校。一般的には、小規模で教師の自宅で行われる。

8　ブルキナファソにおいても、クルアーン学校の生徒であるタリベ(アラビア語で学生を意味するターリブ(ṭālib)が訛ったもの)が「ストリート・チルドレン」の同義語として用いられ、「保護」の対象とされている(清水 2018)。

9　同様の研究として、カメルーン北部のクルアーン学校における教示の方法を論じた、社会言語学者のムーアによる研究がある(たとえば、Moore 2006, 2008, 2013)。

（Gomez 2018）。カンは、西アフリカにおけるイスラーム知識人の形成や、主として読まれてきたアラビア語の著作群の紹介、イスラーム教育の近代化をめぐる歴史的変遷をまとめている（Kane 2016）。また、さきに紹介したウェアも、クルアーン学校における伝統的な教育と、クルアーンの身体化・具現化（embodiment）をおこなうクルアーン学習という認識論が西アフリカの社会のなかでどのように形成・共有されていたのかについて、西アフリカのイスラーム到来からの長期的なタイムスパンでの叙述を行っている（Ware 2014）。

まとめれば、まず、2000 年代初頭に 1990 年代までの成果を統合した研究があらわれた。そして 2000 年代以降、人類学を中心とした研究では、公共性やイスラーム教育などが新たな研究テーマとなっていった一方で、歴史学・イスラーム思想史研究では、アラビア語史料を広範に用いた研究が出現するようになり、従来とは大きく異なる研究があらわれるようになった。こうした潮流は、III と IV であつかうスーフィー教団研究と歴史学・イスラーム思想史研究、V で取りあげる言説的伝統概念をめぐるイスラームの人類学の動向においてもみてとることができるだろう。

Ⅲ　西アフリカのスーフィー教団研究

本章では、西アフリカのスーフィー教団を対象にした研究の変遷を概観する[10]。現在、西アフリカでは国民の半数以上をムスリムが占める国が多いが、なかでもセネガルは国民のおよそ 9 割以上をムスリムが占め、そのほとんどがいずれかのスーフィー教団に所属している。近隣の西アフリカ諸国と比べても、さらにはほかのイスラーム地域と比較しても、セネガルは著しく異質な状況にある。そうした状況から、西アフリカのスーフィー教団研究は、セネガルを中心に進められてきた。20 世紀初頭から、セネガルにはカーディリー教団、ティジャーニー教団、その支教団であるニヤセン教団、そしてムリッド教団とライエン教団が共存している。

セネガルにおけるスーフィー教団研究は、教団の社会的状況や経済的側面の議論が 1980 年代までの主流をなしていた。スーフィー教団のなかでも特にムリッド教団はイスラームと現地の宗教体系の混淆としての「黒イスラーム」や、「アフリカ的イスラーム」として捉えられ、ほかの教団に比べて多くの研究者の関心を集めてきた（たとえば、Monteil 1966, 1980; Cruise O'Brien 1971）。そうした研究動向の偏りが「ムリッド中心主義」であること、さらに西アフリカ・イスラーム研究がセネガルに集中して行われてきたことが「セネガル中心主義」として批判されている（Triaud 2014）。つまり、西アフリカのイスラーム研究において、ムリッド教団研究の事例を過度に一般化して、「アフリカ的イスラーム」の特徴とする論調への批判である。また、ムリッド教団内部の政治的運動の広がりやその多様性についての検討もされてこなかったことが指摘されている（Dozon 2010）。

そのような批判と並行しつつ、ムリッド教団以外のスーフィー教団の研究も増えつつある。ティジャーニー教団の研究は、西アフリカ各地の事例研究がされているほか（Triaud et Robinson (éds.) 2000）、ヴィラロンによるセネガル中部のムリッド教団とティジャーニー教団の儀礼を比較した研究がある（Villalón 1995）。カーディリー教団については、バトランがその歴史を詳細に記述している（Batran 2001）。ライエン教団については、政治学者ラボルド（Labordo 1995）の著作が同教団についての初めてのまとまった資料となっており、その資料と現地調査に基づいて、盛（2012）がライエン教団と漁民レブーについて詳細で微視的な系譜分析を行っている。さらに 2000 年代以降、ニヤセン教団の研究が増加している。多くの研究者が、セネガルだけでなく、モーリタニアやガーナ、ニジェール、カメルーンなどに伝播・発展してきたニヤセン教団の事例をあつかっている（Barnes 2009; 盛 2014 など）。特に盛は、ニヤースの思想に基づいてモーリタニアにて計画的になされている村作りの事例や、カメルーンのバムン王国とニヤセン教団の関係について詳細な民族誌を記述している（盛 2016, 2019）。

さらに、セネガルのスーフィー教団について近年なされた歴史研究は、セネガルおよびムリッド教団の事例を安易に単純化・一般化する「セネガル／ムリッド中心主義」を相対化する視座を与えている。2000 年代以降の研究では、植民地行政や地域社会と教団の関係について詳細な分析がなされ、その複雑な様相が明らかにされてきた。ロビンソンは、各教団の導師たちと植民地行政との交渉の過程から、行政による「統治」と教団の「適応」について分析した（Robinson

10　なお、西アフリカのスーフィー教団およびその研究の概要については、ゼーゼマンによるまとめがある(Seesemann 2010)。

2000)。また、植民地期における地域社会や教団内外のムスリム知識人の動きに注目する研究も進み、19 世紀半ばから 20 世紀初頭までのセネガル中部地域を対象に、ウォロフの王族や社会の変容の過程についての詳細な分析が進んだ(Searing 2002; Glover 2007)。さらに、バンバと同様ンバケ家の家系に属するセネガル人歴史学者のバブーは、バンバの生涯についての口頭伝承を集め、バンバの著作や同時代のイスラーム知識人たちの活動や教育法についての記述を試みている(Babou 2007a)。

これらの歴史研究の意義は、教団の主要な教義や創始者の思想を単純化した説明によって、植民地行政や国家との敵対あるいは協力関係について論じる議論の枠組みを脱したことにある。そのうえで、教団内外のさまざまな知識人たちの活動や地域社会の変容などの文脈に埋め込まれたものとしてムリッド教団のさまざまな活動を捉えなおすことによって、思想や教育、それにともなう信徒の宗教活動の変化など、新たな論点を提示してきた。それらは、90 年代までに定式化された議論を相対化し、かつ地域固有の文脈に目を向けさせた点において、「セネガル/ムリッド中心主義」を乗り越えようとする試みであったと評価することができるだろう。

セネガルのスーフィー教団研究では、2000 年代以降、上記のように地域社会を含めた教団内外の固有の文脈を明らかにする研究が発展してきた一方で、セネガル以外の地域では教団単体で研究対象となることは少ない[11]。スーフィー教団は、近年増加するイスラーム改革主義運動の研究のなかで、あくまでそれらの運動との関係のもとで、「伝統的」な権威として位置づけられることが多い。その背景にある議論の構造は、たとえば 80 年代のカリスマ論において、植民地行政や国家などの「近代」と対立する「伝統的」勢力としてスーフィー教団が描き出されていることにみることができる(Cruise O'Brien and Coulon 1988)。1990 年代には、「合理化」を求める改革主義に対立するものとしてスーフィー教団が位置づけられており(Brenner (ed.) 1993; Rosander 1997; Masquelier 1999)、2000 年代以降も同様の議論の枠組みが用いられてきた。こうした枠組みは、ナイジェリアやカメルーン、ガーナなどでのイスラーム改革主義運動の研究においても、各地に分立したスーフィー教団は「伝統的」な「セクト」などとして記述されていることからもうかがい知ることができる(Taguem Fah 2000; Adama 2006; Dumbe 2013; Mustapha (ed.) 2014; Kobo 2015)。しかし同時に、このように改革主義者とスーフィーを対立するものとして捉える見方そのものが、近年では疑問視されるようになってきている(Soares 2005)。たとえば、ロイマイヤーや盛は、反スーフィーの改革主義運動をイスラーム改革と同一視する傾向を批判し、従来の二項対立的な理解の構造を刷新しようと試みている(Loimeier 2016; 盛 2019)。そうした研究では、必ずしもスーフィー教団が反「近代」としての「伝統」に位置づけられることはなく、むしろ「近代」化の過程において、さまざまなアクターが正統性をめぐって争う図式が提示されてきた[12]。

以上のように、スーフィー教団をめぐる政治的対立をあつかった研究が展開する一方で、ムスリムの実践や日常生活を対象とした人類学的研究も増加している。そのひとつに、ヨーロッパの各地で報告される移民研究の一部をなす、セネガル人の移民コミュニティと宗教的紐帯を対象にした研究がある(Riccio 2004; Bava 2017; 榎並・新山 2017)。また、日常生活と信仰の関係を主題にしたコクランの研究は、対象とするインフォーマントをひとつの教団の信徒に限定せず、選定したムスリムの個別のインタビューと生活史の記述を通じて、日常生活においてムスリムたちが信仰を見出す過程を明らかにしている(Cochrane 2017)。ニヤセン教団信徒の宗教実践を対象としたヒルは、フェミニズム研究とイスラームの人類学を架橋しつつ、女性たちの日常的実践と信仰の関係を描いている[13](Hill 2018)。このように日常生活を対象とした人類学者の研究と並行して進められている社会言語学者らの研究動向も興味深い。マクローリンは、スーフィー教団の信徒による実践のひとつとして商業音楽の歌詞を分析し、アマドゥ・バンバなどの大衆文化のなかでの表象を論じつつ[14]、スーフィー教団におけるウォロフ語の言語的な実践についても詳細に論じている(McLaughlin 1997, 2011; McLaughlin

11　例外としては、ブルキナファソのハマウィー教団についてあつかった Dassetto et al. (2013)などがあげられる。
12　ほかにも、ニジェールの改革主義運動についてあつかったスナイの研究では、必ずしもスーフィーに対して対立的ではない改革主義運動が描かれている(たとえば、Sounaye 2015)。またヒルは、ニヤセン教団の内部で、「正しい」イスラーム実践を志向する一部の信徒たちの批判によって、教団内のズィクルの実践が変質した事例をあつかっており(Hill 2016)、教団を一枚岩として捉えることの問題点が明らかになっている。
13　ここであげたヒル以外にも、スーフィー教団研究であるか否かを問わず、ムスリマ(女性ムスリム)の宗教実践に関する研究は多数ある。たとえばガンビアのタブリーグ運動にかかわる女性たちをあつかった Janson (2017)や、カメルーンにおけるムスリマのヴェール問題をあつかった van Santen (2010)などがある。
14　ブリガグリアも同様に、スーフィー教団によって作られた商業音楽がナイジェリア警察の汚職を風刺している事例についてあつかっている(Brigaglia 2008)。

and Mboup 2010)。また、同様の研究として、口頭伝承を物語の叙述形式に注目してテクスト分析を行ったセックの研究(Seck 2013)や、著名なスーフィーの逸話を内容と語りの形式から分析したローの研究(Lo 2018)などがあげられる。これらの研究では、日常的な実践に着目することによって、従来捉えられてこなかったスーフィー教団の活動のさまざまな側面が明らかにされてきている[15]。

まとめよう。本章では、西アフリカのスーフィー教団研究における「セネガル/ムリッド中心主義」批判から出発し、各地の教団の研究事例をまとめ、歴史研究の貢献、そして改革主義者対スーフィーという議論の枠組みとそれへの批判、そして近年の日常的な実践への着目といったトピックをあつかった。紹介しきれなかった研究も多数存在するが、現在、西アフリカのスーフィー教団を対象とした研究は、歴史学、人類学、社会言語学など各分野を架橋しながら学際的に進められており、新たな展開をみせてきたといえる。

Ⅳ アラビア語資料群を用いた歴史学・イスラーム思想史研究

本稿のⅡですでに確認したように、2000年以降、アラビア語を一次資料として用いて、経済史や政治史などさまざまなテーマを論じる研究が増加してきた。本章では、2000年以降のアラビア語資料群を用いた研究の動向について、特に歴史学的研究とイスラーム思想史研究を中心に論じることにしたい。はじめに、アラビア語資料を用いた研究が増加した要因ともなったアラビア語著作目録とデータベースについて紹介する。次に、前近代の西アフリカ諸王国を対象にした歴史学の研究動向について述べる。その後、2000年代に研究が大きく進展した西アフリカ・スーフィズム/イスラーム神秘主義思想研究を取りあげる。最後に、近年研究者のあいだで特に関心が寄せられているアジャミー資料研究の概要を述べる。

2000年代以降、アラビア語写本・刊本著作目録、データベースが整備されてきた。まず、西アフリカ・イスラーム研究の碩学ハンウィックを中心として、セネガンビアからニジェールに至るまでの広範な地域のアラビア語著作目録が作成されている[16](Hunwick 2003)。その後、ハンウィックの仕事を引き継ぐかたちで、主にスチュワートがモーリタニアおよびサハラ西部におけるアラビア語著作目録を編纂している[17]。ただし、本目録は以前の目録と記載形式が異なり、テーマ別ではなくニスバ名[18]の順に立項されている(Stewart (ed.) 2016)。さらに、スチュワートやホール等が構築した西アフリカ・アラビア語写本データベース(WAAMD)[19]では、写本の基本的な情報を確認することができる。また、ドイツのフライブルク大学がテュービンゲン大学の協力のもとに作成したデータベース(OMAR)[20]では、モーリタニアのアラビア語写本の一部を閲覧することが可能である。以上のように、これらの研究基盤が整備されたことは、以下で紹介するアラビア語資料を広範に用いた研究の増加を可能にしたといえる。

前近代における西アフリカ諸国に関連する歴史学的研究も独自の展開をみている。最初に言及しなければならないのは、西アフリカ最古の年代記資料『スーダーン年代記』(*Ta'rīkh al-Sūdān*)のハンウィックによる英訳である(trans. by Hunwick 1999)。この英訳は、膨大な資料や先行研究についての知見に基づいた注釈が付されており、西アフリカ・イスラーム研究における記念碑的著作のひとつである。また、アラビア語碑文資料を分析したモラエス・ファリアスは、年代記資料の歴史叙述からはうかがい知ることのできない情報を提示している(Moraes Farias 2003)。さらに、この研究は、西アフリカで書かれたアラビア語資料群——特に『スーダーン年代記』、『探求者の年代記』(*Ta'rīkh al-Fattāsh*)、『歴史解題』(*Notice Historique*)——を用いた従来の文献学的研究が、素朴な歴史の再構成となっていることに異論を呈している。この研究によれば、サアド朝モロッコの侵攻によりソンガイ王国が瓦解した結果、当該地域にお

15 日常生活や言語的実践以外にも、ムリッド教団の祝祭を対象に開催の経緯や運営組織について詳細に記述する研究があるほか、アマドゥ・バンバの肖像を用いたアート作品についての研究もあり、研究対象はより細分化されてきた(Roberts and Roberts 2003; Babou 2007b)。
16 セネガルのアラビア語写本・書店情報は、Kane (ed.) (1997)、苅谷(2013)、末野(2017)を参照。
17 モーリタニアのアラビア語写本情報は、Rebstock (2001)、Rebstock (ed.) (2003)を参照。
18 出身地や帰属する集団に因んだ名前を指す。
19 West African Arabic Manuscript Database, [https://waamd.lib.berkeley.edu/home] (最終閲覧日:2020年1月20日)
20 University of Freiburg, Oriental Manuscript Resourse, [http://omar.ub.uni-freiburg.de/index.php?id=homepage](最終閲覧日:2020年1月20日)

ける歴史語りの統合の試みが生じ、それが「年代記ジャンル」（ta'rīkh genre）という叙述の形式を生み出したとされる。そして、『スーダーン年代記』などは、このジャンルを構成するものだと捉えられるという見方を提示した（Moraes Farias 2003: 69-85）。このような歴史研究は、アラビア語文書のジャンルそれ自体を分析対象とする新たな研究の方向性を示している。この議論をうけて、ノビリは、モラエス・ファリアス記念論集のなかで、モラエス・ファリアスによって 17 世紀末に消失したとされた「年代記ジャンル」が 20 世紀まで存続していたという試論を提示している（Nobili 2018）。

このようにアラビア語で書かれた歴史資料を、過去の事象を再構成するための材料とするのではなく、資料そのものの性質を研究対象とする研究が近年進展しつつある。たとえばノビリとマテーは、ドラフォスとウダによって編集・校訂・翻訳された『探求者の年代記』が、17 世紀後半にイブン・ムフタール（Ibn al-Mukhtār, 没年不明）という人物によって書かれた『イブン・ムフタールの年代記』（*Ta'rīkh Ibn al-Mukhtār*）と、19 世紀にマーシナの指導者アフマド・ロッボ（Aḥmad Lobbo, 1845 年没）に仕えたヌーフ・ブン・アッ=ターヒル（Nūḥ b. al-Ṭāhir, 没年不明）なる人物によって書かれた『探求者の年代記』（*Ta'rīkh al-Fattāsh*）という 2 つの異なる著作の合本である可能性を主張している（Nobili and Mathee 2015）。これらは分析の前提としてなされる、いつ誰によって書かれたものであるのかを明らかにすることを目的とする歴史学における史料批判であるが、こうした基礎的な研究それ自体も展開し、従来の歴史観を相対化する可能性を示している。

ここまで述べてきたように、アラビア語による歴史資料の研究は、19 世紀以来の校訂・翻訳とそれらに基づいた歴史的事実の再構成という段階を脱して、2000 年代以降、資料そのものの形式を分析するなど、研究の緻密化が図られてきた。このことと、各種写本目録やデータベースの編纂は、相互補完的に進められてきたといえるだろう。

他方、西アフリカにおけるスーフィズム／イスラーム神秘主義思想の研究も並行して発展してきた。2000 年以前は、若干の例外を除き（たとえば、Ryan 2000）ハンウィックが西アフリカにおけるスーフィズム／イスラーム神秘主義思想についての簡便な見取図を提示したのみであったが（Hunwick 1997）、2000 年代以降、本格的な研究が展開していくことになる。その一翼を担ったのがイブラーヒーム・ニヤースの思想研究である。たとえばゼーゼマンは、イブラーヒーム・ニヤースが生誕した 1900 年から 1951 年までの期間を対象に、彼の思想の鍵概念である溢出（fayḍa）が、彼自身と「共同体」（jamā'a）に与えた影響を歴史的側面と思想的側面から考察している（Seesemann 2004, 2011）。またライトは、イブラーヒーム・ニヤースの著作群を軸に、西アフリカにおけるイスラーム諸学の伝統的教授法である直接的な師弟関係が、当該地域のムスリム・アイデンティティの形成に与えた影響について考察している（Wright 2010a, 2015a, 2015b）。また彼は、イブラーヒーム・ニヤースの主著『覆いを取り除くもの』（*Kāshif al-'Ilbās*）の思想史的な位置づけについて検討し、イブラーヒーム・ニヤースの思想に、特にイブン・アラビー（Muḥyī al-Dīn ibn 'Arabī, 1240 年没）の思想をイスラーム世界全般に伝えたシャアラーニー（'Abd al-Wahhāb al-Sha'rānī, 1565 年没）と、西アフリカの高名なイスラーム学者であったムハンマド・ヤダーリー（Muḥammad al-Yadālī, 1753 年没）の影響を明らかにしている（Wright 2010b）[21]。さらにライトは、イブラーヒーム・ニヤースにおける「タリーカ・ムハンマディーヤ」（al-ṭarīqa al-muḥammadīya; 預言者ムハンマドの道）概念[22]についても論じている（Wright 2015c, 2018）。

近年、神秘主義思想研究において、詩を資料として用いた研究も増加している。サイイドは、従来、ジハード運動に焦点をあてた歴史研究が大きな比重を占めていたアル=ハーッジ・ウマル・タル（al-Ḥājj 'Umar Tal, 1864 年没）の神秘主義詩を主たる一次資料として用いて、その思想を論じている（Syed 2017）。また、サイイドと、すでにふれたウェア、ライトによって、アマドゥ・バンバなどの西アフリカを代表するイスラーム知識人の詩を含むアラビア語著作の抄訳集（Ware, Wright and Syed (eds. and trans.) 2018）が出版されている。この抄訳集は、今後、西アフリカのイスラーム神秘主義思想を研究する際に欠かすことのできない基本文献となるだろ

21　本論文におけるライトの分析手法は、ラトケ（Radtke 1995）がアル=ハーッジ・ウマル・タルの主著『槍』（*Rimāḥ*）のなかで引用される著作群を整理した際の方法に従っている。

22　研究者のあいだでは、イスラーム思想史上、「タリーカ・ムハンマディーヤ」という語を初めて用いた人物は、ガズワーニー（'Abd Allāh al-Ghazwānī, 1528-9 年没）であるとされていた。しかし、アッダスは、イブン・タイミーヤ（Ibn Taymīya, 1328 年没）の弟子イブン・カイイム・ジャウズィーヤ（Ibn Qayyim al-Jawzīya, 1350 年没）の著作『タリーカ・ムハンマディーヤに関するアレッポ人の手紙』（*al-Risāla al-ḥalabīya fī al-ṭarīqa al-muḥammadīya*）の表題でのその術語の利用から、この語が 16 世紀以前に遡れる可能性を指摘している（Addas 2015: 108）。この論点については、チフの論文（Chih 2019）も参照。

う。同じくブリガグリアは、ナイジェリア出身のムハンマド・バララベ（Muḥammad Balarabe, 1967 年没）やアブー・バクル・アル=アティーク（Abū Bakr al-'Atīq, 1974 年没）等の手によって書かれたハウサ語韻文著作を軸に、ティジャーニー教団の思想の解明に取り組んでいる。これらの研究は、ヒスケット（Hiskett 1975）以来のハウサ語韻文著作研究をさらに深化させる試みともいえる（Brigaglia 2017, 2018）。

他方で、人類学とは異なって、思想研究においては女性スーフィーをあつかう研究は少なかった[23]。代表的な女性のスーフィーとして、ソコト・カリフ国を建国したウスマーン・ブン・フーディー（Uthmān b. Fūdī/ Usman dan Fodio, 1817 年没）の娘であり、アラビア語とハウサ語で多数の著作を書き残したことで知られているナナ・アスマゥ（Nana Asma'u, 1864 年没）があげられるだろう。ボイドとマックは彼女の歴史的背景、教育活動、思想的営為などを明らかにしている（Boyd 1989; Boyd and Mack 1997; Boyd and Mack (eds.) 2013; Mack and Boyd 2000）。

ここまで概観した 2000 年代以降のイスラーム神秘主義思想研究は、西アフリカで書かれたアラビア語著作に基づいて、西アフリカのイスラームを、中東・北アフリカにおけるイスラーム思想の「中心」とかけ離れた受動的な「辺境」とみなす「黒イスラーム論」とは異なる歴史像を示したという点で大きな意義を有しているといえるだろう。

最後に、思想研究において新たな資料や対象の開拓が続いていることと関連して、近年、特に注目されているアジャミー研究について述べることにしたい。アジャミーとは、アラビア語で「非アラビア語話者」を意味するアジャム（'ajam）の語に由来する。サハラ以南アフリカという地域的文脈においては、アジャミーはアラビア文字で音声転写されたアフリカの現地語を指す。西アフリカでは、ハウサ語、ウォロフ語、フルベ語、ヨルバ語、カヌリ語、マンデ諸語などのアジャミーをあげることができる[24]（Ngom and Zito 2012; Mumin and Versteegh (eds.) 2014; Adama 2008, 2015）。

アジャミー資料を用いた思想研究として、ンゴムやジトによるウォロフ語の資料（ウォロファル wolofal）の研究があげられる。彼は、ウォロフ語の口頭伝承やウォロファル資料を用いながら、ムリッド教団の信徒たちが師であるアマドゥ・バンバの人物像や教えをどのように理解しているかを明らかにした（Zito 2012; Ngom 2016）。また、ンゴムとクルフィーによって編集された *Islamic Africa* 誌の特集号「アフリカにおけるイスラームのアジャミー化」は、アジャミー資料を用いる研究の今後の可能性を示している（Ngom and Kurfi 2017）。アジャミー資料は、散文と韻文それぞれの形式で書かれており、その内容は、クルアーンの注釈書、法学・神学、スーフィズムの理論書などのイスラーム諸学だけでなく、天文学や暦学など多岐にわたり、アフリカ諸文化とイスラームの相互作用をアジャミー資料から読み取ることができる。また「アジャミー化」は、土着の文化とイスラームの混淆としてのシンクレティズムではなく、諸文化とイスラームの相互作用と相互補完的な関係の発露として位置づけられている（Ngom and Kurfi 2017: 4-5, 9-10）。ンゴムとクルフィーが述べているように、アジャミー研究は、イスラーム学、歴史学、人類学、言語学などを横断する学際的な研究領域として構想されており（Ngom and Kurfi 2017: 11）、今後、ますます活発になることが期待される分野となっている。

V　イスラームの人類学の理論的展開

本章では、西アフリカ・イスラーム研究にも大きな影響を及ぼしている、いわゆるイスラームの人類学をめぐる議論のレビューを行う。イスラームの人類学の目指すべき方向性の議論は、すでにいくつかの優れた学説史紹介でなされている（たとえば、Soares and Osella 2009; 谷 2015）。そこで本章は、アサドによる著名な論文（Asad 1986）（以下、86 年論文）と、シルケによって提出された啓発的な論考（Schielke 2010）を中心に、1980 年代以降の言説的伝統（discursive tradition）概念をめぐる議論に焦点を絞って紹介する。近年の西アフリカ・イスラーム研究においても、「ふつうのムスリム」（ordinary Muslims）や「俗世のイスラーム」（Islam mondain）に着目する必要性を説く議論が影響力を増しており（Soares 2000, 2014; Otayek and Soares 2007; Soares and Osella 2009）、これはシルケの示した方向性と合致して

23　*Islamic Africa* 誌の第 5 巻 2 号では、宗教的権威を有しているムスリマに関する特集が組まれ、西アフリカ各地の事例研究が紹介されている（Frede and Hill 2014）。

24　ムウミンとヴェルスティーグが編纂した論集『アフリカにおけるアラビア文字――書式システムの利用に関する研究』では、アフリカのアラビア文字の音素と書記素の多様性に基づいた音声転写と文字転写のシステムなどについて考察されている（Mumin and Versteegh (eds.) 2014: 5-21）。

いる。この研究動向を踏まえると、シルケの問題意識を構成した議論の流れをおさえることは、西アフリカ・イスラーム研究の現状と課題における理論的背景を検討することに直結するといえる。そのうえで、エスノメソドロジー（以下、EM）の視点から、残された課題を解決するひとつの方法を示唆する。詳細は後述するが、EM の視点を導入する利点は、イスラーム的な行為とその文脈との相互反映性を前提とすることで、ミクロ−マクロの接続問題を回避した地点から、研究を開始できるということにある。II で示した 2000 年代以降の西アフリカ・イスラーム研究が、公共性への強い関心のもとで展開してきていることの背景には、このミクロ−マクロの接続問題の回避、ないしイスラームの中心——辺境の二分法の回避への志向性がみられる。したがって、以下で EM との関連を示唆しつつ、アサドの議論を検討することからはじめたい。

アサドは 86 年論文において、言説的伝統という概念を提示している。まずは、以下の一節を引用する。

> イスラームの人類学を書こうとするのであれば、ムスリムがしているように、クルアーンとハディースという基礎となるテクストを内包し、そしてそれらを自身と関連づけるひとつの言説的伝統という概念からはじめなければならない。イスラームは、特徴的な社会構造でもなければ、信念、人工物、慣習、道徳の雑多な集合体でもない。それはひとつの伝統なのだ（Asad 1986: 14）。

このように言説的伝統概念は、イスラームを何らかの信念やモノの集合体とみなしたり、ある特定の社会構造とみなしたりするような考えを排除することによって、時代・地域・場面によってさまざまなかたちをとるイスラーム的なるものを、包括的に論じる視点を提供してきた。しかし、こうした結論部分だけを取り出すだけでは、言説的伝統=イスラームの教義という単純な図式が成立することも容易であり、あえてアサドが教義ではなく言説的伝統という概念をつくりだしたことの意義がわかりづらい。そこで、アサドがこの概念を提示するにあたって、想定していた論敵をおさえておく必要がある。

86 年論文では、先行する研究として、ギルセナンやギアツなどの論考があげられている。なかでもゲルナーによる「振り子理論」は、主要な論敵として明言されている（Asad 1986: 2）。「振り子理論」とは、簡潔にいえば、イスラーム社会のあり方に、部族社会と都市社会という 2 つの極を想定し、そのあいだをイスラーム社会は歴史的に常に揺れ動いてきた、とする理論である。これら 2 つの極には、特定のイスラームのあり方が付随し、それらは「社会秩序の青写真」として、社会のあるべき秩序を定めているとする（ゲルナー 1991（1981））。

ゲルナーに対するアサドの批判は、研究者による現実の説明のためのリソースとしてイスラームが位置づけられているというようにまとめられるだろう。ゲルナーの「振り子理論」では、説明のトピック（主題）がイスラームでありながら、同時にその説明のためにイスラームに対する事前の了解をリソースとして用いるという、循環的な記述になっている。その結果、説明のトピックとなるべきムスリムたちは、研究者のあらかじめ指定したシナリオ通りに動く人形のような存在になってしまうのである[25]（Asad 1986: 7-11）。

こうした問題を踏まえて、言説的伝統という概念は提出されている。ムスリムたちは研究者の想定するシナリオにそって動くのではなく、さまざまな状況のもとで、イスラームの言説的伝統から推論して、そのつど適切に行為を産出する存在として位置づけなおされる[26]。そして人類学者は、彼らの行為の産出方法から出発し、その記述をなすことを課題とすべきなのだと主張される[27]（Asad 1986: 14-16）。「ムスリムであること」はムスリム個々人の自己認識や属性の問題ではなく、あくまで言説的伝統を志向する人びとが取り結ぶ関係のなかでそのつど達成されることとして位置づけられている（Asad 1986: 2）。

86 年論文の意義は、教義の言い換えとしての言説的伝統概念の提示ではなく、言説的伝統概念をつくりだすことによって、イスラーム的なるものを、説明のリソースから、説明のトピックとしてあつかう方途を開いたことにある。

25　ガーフィンケルの言葉を借りれば、ムスリム個々人はみな「文化的判断力喪失者」（cultural dope）（Garfinkel 1967: 68）としてあつかわれているということになる。しかしこの批判が、ゲルナーが照準していたスケールの記述において、果たして実際にどれほど問題であったのかは、個別に検討されるべきでもあるだろう。

26　言説的伝統から推論するということは、伝統への従順な服従を意味しない。このことは、「イスラームの伝統は、必ずしも過去になされたことの模倣であるというわけではない」（Asad 1986: 14-15）というアサドの留保にもあらわれている。服従を含意しないという点で、「伝統」はいわゆる「教義」とは異なる概念であるといえるだろう。

27　アサドの主張はまさにガーフィンケルが『エスノメソドロジー研究』（Garfinkel 1967）において提示した EM の研究姿勢と類似していることがわかる。なおゲルナーは、EM に対して非常に強硬な批判を行っている（Gellner 1975）。ゲルナーに対する EM 側からの反論は、リンチ（2012: 42-44）を参照。しかし、このような論争状態も踏まえつつ、本章では最終的に、EM 的観点からゲルナー（1991（1981））も再評価しうることを述べる。

こうしたアサドの問題提起をうけてなされた研究のなかで著名な研究のひとつは、マフムードによるエジプト人ムスリマの民族誌（Mahmood 2005）である。この民族誌では、ムスリマたちの「モスク運動」が研究対象とされている。「モスク運動」とは、ムスリマたちが街のモスクに集まり、「敬虔な主体」になるための勉強会を行う運動を指す。この民族誌でなされた重要な指摘は、第一に、ムスリマたちが「敬虔な主体」になろうとしているというだけでなく、そのための方法が勉強会ごとに異なっていること、第二に、方法が異なるにもかかわらず、イスラームの言説的伝統が共通して必ず規範として参照されているということである。これらの指摘から、ムスリマたちはあらかじめ指定されたシナリオに従って、男性に対する従属的関係に甘んじたり、あるいはそうした従属的関係を転覆しようとしたりする存在として描かれるべきではないといえる。むしろ彼女たちは、言説的伝統を参照しながら、そのつど適切な方法で行為を産出する行為主体（エージェント）なのである。こうして、女性たちのイスラーム復興運動に常につきまとってきた問い、すなわち「なぜムスリマたちは自ら従属的な存在にすすんでなろうとするのか」という問いは、根本から無効化されるのである。

アサドからマフムードに至る潮流は、「イスラームの人類学」において無視することのできないものとなっている。西アフリカ・イスラーム研究においても、アサドに理論的基盤をおく民族誌（Soares 2005）、言説的伝統概念を用いたレビュー論文（Reese 2014）、言説的伝統概念に類似する「正典（Canon）」概念によってナイジェリア北部のイスラーム改革主義運動を分析した研究（Thurston 2016）などがある。他方で、アサド自身の論考とその影響下でなされた研究に対する批判もなされている。その代表がシルケである。

シルケは、マフムードと同様に、エジプトをフィールドとする人類学者である。シルケの議論を特徴づける問題意識をまとめると、マフムードらの議論ではムスリムたちの敬虔さへの志向性が自明視されており、その志向性を駆動する要因が十分に探求されていないというものだ。こうした問題意識を端的にいえば、「イスラームの人類学にはイスラームが多すぎる」（Schielke 2010: 2）ということになるだろう。

さらにシルケは、言説的伝統概念とそれを用いた諸研究を、イスラームをオブジェクト化する言説と重ねる。要するに、言説的伝統は研究者たちがイスラームをひとつの完結した全体としてみなすことの免罪符になっているというわけである（Schielke 2010: 4-5）。そこでシルケは、ムスリムたちの生きる複雑で多様な日常生活（everyday life）に焦点をあて、イスラーム的に敬虔であるような生き方（あるいはそうでない生き方）がどのように日常生活において選択されているのかをみていかなければならない、と主張している（Schielke 2009, 2010, 2012, 2015; Schielke and Debevec 2012）。

シルケらは、ムスリムによる敬虔な生き方の追求を自明視せず、その周囲を取り巻く複雑かつ多様な諸要素（日常生活）との関係において記述する方針を示している。それは言説的伝統へのさまざまな向き合い方の存在を前提とした、記述の緻密さのさらなる追求である。

西アフリカ・イスラーム研究では、先に述べたようにソアレスがシルケと類似した問題関心をもつことに加えて、イスラーム改革主義運動研究に関するノルテの理論的レビュー（Nolte 2019）など、近年の研究にシルケの議論が援用されることは少なくない。代表的なものとしては、ヤンソンによるガンビアのタブリーグの活動に関する研究（Janson 2014）がある[28]。

しかし、シルケの議論には問題もある。ひとつは、何をもって「日常生活」を記述できたといえるのかがわからないということだ。シルケの提言をそのまま受け取ると、非常に細かい話を延々と積み重ねていく以外に、イスラームの人類学に可能なことはないというような悲観論にもつながりかねない[29]。さらに、「日常生活」の複雑さを突き詰めて、記述の緻密さを高めようと考えれば、その追求は無限に可能である。もうひとつの問題は、シルケのマフムード批判は、「敬虔でない生き方」と「そもそもイスラームとは何の関係もない生き方」との区別を不可能にするという点だ。確かに敬虔さへの志向性を自明視することはできない。しかし、あくまでイスラームの人類学とする限り、言説的伝統を構成させている諸制度と道具――たとえば、法制度や慣習、書字・印刷技術などの道具――と言説としての言説的伝統の双方を論じるという基本的な姿勢は、失われるべきではないだろう（本特集の「序――西アフリカ・イスラーム研究の新展開」を参照）。

これらの問題を解決するために、EM の「ローカルな組織

28　シルケの議論とは直接的な関連はないが、日常生活のなかにイスラームがどのように息づいているのかという点については、ジェンネについての伊東の民族誌（伊東 2016）がわかりやすく示している。

29　シルケの議論にはこうした問題点以外にもさまざまな批判が寄せられている。たとえば、マフムードへの批判と裏返しになっている、規範と人間の関係に関するシルケの目的論的姿勢に対する批判が代表的だろう（Fadil and Fernando 2015）。

化」[30]という発想を導入することで、当事者の理解に即したスケールのもとでの記述をなす、という方向性がありうるだろう。記述のスケールを「ローカル」な実践上の課題として捉えなおすことで、いたずらに緻密さだけを追求する、あるいは不適切な一般化に走るといった、ミクロ−マクロの接続に関連する問題を回避することができる[31]。アサドは86年論文において、イスラームの人類学を、言説的伝統概念を中心に諸概念の結びつきをたどる学（ウィンチ 1977）[32]として定式化したと考えるなら、ゲルナーからシルケに至る諸研究の記述スケールの違いを、一方向的な緻密さの進歩ではなく、調査対象の行為や活動における諸概念の結びつき方の違いによって生じるものとして、並列に再評価することもできるはずだ。

まとめよう。本章では、2000年代以降の西アフリカ・イスラーム研究の、ひとつの理論的背景をなすイスラームの人類学の議論を、アサドとシルケの紹介を通じて整理した。この整理を踏まえると、イスラームに関連する何かを調べるプロジェクトは、常に言説的伝統概念を中心とした概念の結びつきをたどる試みであるといえる。このように考えると、イスラームの人類学は知識人の著作や論争から、道ばたでなされる日常的なやりとりまでの多様な分析対象や方法を包含する学問領域として、再度構想しなおすことができる。本章はこのようにして、2000年代以降の西アフリカ・イスラーム研究の、特に公共性をめぐる議論を中心に共有されてきた理論的な背景について見通しをつけつつ、EMを介することで、ミクロ−マクロ問題の解決という論点の提示と、今後の可能性を示唆したものである。

Ⅵ　結論

本稿では、2000年代以降の西アフリカ・イスラーム研究を広範にレビューし、これらの研究の紹介を行ってきた。大筋をまとめると、2000年代初頭に1990年代までの成果を統合した研究があらわれ、2000年代後半以降、人類学を中心とした研究では、イスラーム教育や公共性などが研究の主題となっていった。他方で、歴史学・イスラーム思想史研究では、アラビア語資料を広範に用いた研究が出現するようになった。ムスリムの信仰に基づくNGOやライシテ（公共空間における脱宗教性）などといった特定のテーマの研究、また、特定の思想家やスーフィー教団の研究は、それぞれ個別の蓄積を形成しつつある。

これらの研究の進展とともに、テーマや分析の専門化や細分化が今後も進行していくことは疑いえない。しかし、いずれの研究であれ、根本的には、西アフリカにおいてイスラームとは何かという問いにつながりうる。その問いは、西アフリカ固有の諸制度・道具と結びついた言説的伝統の個別性と、「ムスリムであること」を成立させる言説的伝統そのものの特性の双方を同時に分析することによって応えうるように思われる[33]。それには、Ⅴの末尾に示されたEMによるミクロ−マクロ問題の解決といったことが必要になるのかもしれない。

他方で、多分野の融合した学際研究の兆しもみえている。スーフィー教団研究と歴史学・イスラーム思想史研究を取りあげたⅢとⅣの末尾では、人類学、言語学、歴史学、思想研究などによる学際研究の可能性が示されている。たとえば、アラビア語やアジャミーの文書に基づいて現在の口頭伝承や教育実践などを分析する、あるいはその逆の手法をとるといった研究の方向性があるだろう。また、このような直接的な融合だけではなく、イスラーム思想史の知識が、現在のムスリムの実践を理解するうえで役立つといった次元での連携は十分にありうることである。

ここで、本稿で言及した研究の可能性や言及できなかった研究もまた包括的に論じられる必要がある。その意味で、本稿は西アフリカ・イスラーム研究の広大な領域を開拓していくためのひとつのステップとして位置づけられるだろう。

30　「ローカルな組織化」という語によって表現されているのは、相互行為が特定の場面において／として秩序づけられていく方法への関心である。この発想およびその前提となる方法（規則）の捉え方については、リンチ（2012: 148, 254-263）を参照。

31　ゲルナーに対するアサドの批判、アサドやマフムードらに対するシルケの批判は、いずれもミクロの多様性がマクロな理論化に反映されていない、という批判としても要約できる。したがって、ミクロな行為とマクロな社会構造を対置しその接続を考える発想そのものを破棄することが有効な展開になると考えうる。「ローカルな組織化」への注目によって、当事者の理解に即した意味のまとまりに立脚することで、ミクロ−マクロ対立を無効化するEMのアイデアについては、前田ほか（編）（2007: 20-28, 258-260, 264-265）が端的に説明している。

32　ここでいう「概念」とは、言葉における／としての行為の成し遂げ方を指している。したがって、概念の結びつきについての学というのは、言語中心の研究ではなく、実践の組織化についての学を指している（酒井ほか（編）2016: i-v）。

33　この点については、本特集の「序——西アフリカ・イスラーム研究の新展開」も参照。

謝辞

本稿の改稿にあたっては、匿名の2名の査読者の的確なコメントによって論述が大きく改善された。深く御礼申し上げる。

参照文献

（日本語文献）

伊東　未来
2016　『千年の古都ジェンネ――多民族が暮らす西アフリカの街』昭和堂。

ウィンチ、ピーター
1977　『社会科学の理念――ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究』森川真規雄（訳）、新曜社。

榎並　ゆかり・新山　智規
2017　「ディアスポラの連帯意識が醸成される場――マルセイユにおけるムリッド・イスラーム共同体の事例から」『神戸国際大学紀要』92: 34-51。

苅谷　康太
2012　『イスラームの宗教的・知的連関網――アラビア語著作から読み解く西アフリカ』東京大学出版会。
2013　「セネガルのスーフィー教団図書館に関する覚書――トゥーバ、ジュールベル、カオラク」『アフリカ研究』82: 25-29。

ゲルナー、アーネスト
1991　『イスラム社会』宮治美江子ほか（訳）、紀伊國屋書店（*Muslim Society.* Cambridge University Press.）。

坂井　信三
2003　『イスラームと商業の歴史人類学――西アフリカの交易と知識のネットワーク』世界思想社。
2015　「北部ナイジェリアのムスリム・コミュニティーとイスラーム改革運動」『サハラ地域におけるイスラーム急進派の活動と資源紛争の研究――中東諸国とグローバルアクターとの相互連関の視座から』、pp. 53-74、日本国際問題研究所。
2017　「マリのイスラーム過激派組織 FLM（Le Front de libération du Macina）の社会的背景：牧畜民の周辺化と地域社会の不安定化」『アカデミア 人文・自然科学編』13: 23-38。

酒井　泰斗・浦野　茂・前田　泰樹・中村　和生・小宮友根（編）
2016　『概念分析の社会学2――実践の社会的論理』ナカニシヤ出版。

佐藤　章
2017　「イスラーム主義武装勢力と西アフリカ――イスラーム・マグレブのアル=カーイダ（AQIM）と系列組織を中心に」『アフリカレポート』55: 1-13。

島田　周平
2014　「ボコ・ハラムの過激化の軌跡」『アフリカレポート』52: 51-56。

清水　貴夫
2018　「ブルキナファソの「ストリート・チルドレン」と教育――近代化とイスラーム文化のはざまに生きる子どもたち」『発展途上国の困難な状況にある子どもの教育――難民・障害・貧困をめぐるフィールド研究』澤村信英（編）、pp. 204-222、明石書店。

末野　孝典
2017　「セネガル研究のためのプラクティカルガイド」『イスラーム世界研究』10: 349-363。

谷　憲一
2015　「世俗主義批判の射程――イスラーム復興に関する人類学の最前線」『文化人類学』79(4): 417-428。

中尾　世治
2016　「解説」、I. K. マガネ（著）ムスリム文化連合ヴォルタ支部史料集――ムスリム文化連合ヴォルタ支部の設立からムスリム協会までの50年について（ボボ・ジュラソ、1962-2012）」田中樹・清水貴夫・遠藤仁（監修）・中尾世治（訳）、pp. 119-184、総合地球環境学研究所。

前田　泰樹・水川　喜文・岡田　光弘（編）
2007　『ワードマップ　エスノメソドロジー――人びとの実践から学ぶ』新曜社。

盛　恵子
2012　『セネガル・漁民レブーの宗教民族誌――スーフィー教団ライエンの千年王国運動』明石書店。
2014　「セネガルで成立したティジャーニー教団の分派ニアセンの予備的研究――成立と拡大・タルビヤと境界の越境について」『スワヒリ&アフリカ研究』25: 86-105。
2016　「モーリタニア・トラルザ地方のマータ・ムラー

ナ村の試み――ニアセン信徒たちによる「教育都市」計画」『スワヒリ&アフリカ研究』27: 101-120。
2019 『ニアセンの拡大（2）カメルーンにおけるニアセン――バムン王国の事例』、2018 年度～ 2020 年度 科学研究費助成事業（基盤研究 C）研究成果報告書。

リンチ、マイケル
2012 『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』水川喜文・中村和生（監訳）、勁草書房。

（外国語文献）

Adama, Hamadou
1999 L'enseignement privé islamique dans le Nord-Cameroun. *Islam et société au sud du Sahara* 13: 7-39.
2006 Islam and the State in Cameroon: Between Tension and Accomodation. In *Local Practices, Global Controversies: Islam in Sub-Saharan African Contexts.* Kamari Maxine Clarke (ed.), pp. 45-68. The MacMillan Center.
2008 Choix linguistique et modernité islamique au Cameroun: le cas du fulfulde et de l'arabe. *Revue des mondes musulmans et de la méditerranée* 124: 47-68.
2015 Les manuscrits arabes et ajami au Cameroun: état des lieux et approche codicologique.*Vestiges: Traces of Record*1(1): 3-14.

Addas, Claude
2015 *La maison muhamamdienne: aperçus de la dévotion au Prophète en mystique musulmane.* Gallomard.

Ahmed, Chanfi
2015 *West African Ulama and Salafism in Mecca and Medina: Jawab al-Ifrīqī, the Response of the African.* Brill.

Amo, Kae
2018 Les dynamiques religieuses dans les milieux de l'enseignement supérieur au Sénégal. In *Les politiques de l'islam en Afrique: Mémoires, réveils et populismes islamiques.* Gilles Holder et Jean-Pierre Dozon (éds.), pp. 93-126. Karthala.

Anonymous
2012 The Popular Discourses of Salafi Radicalism and Salafi Counter-Radicalism in Nigeria: A Case Study of Boko Haram. *Journal of Religion in Africa* 42: 118-144.

Asad, Talal
1986 *The Idea of an Anthropology of Islam.* Center for Contemporary Arab Studies, Georgetown University.

Babou, Cheikh Anta
2007a *Fighting the Greater Jihad: Amadu Bamba and the Founding of the Muridiyya of Senegal 1853–1913.* Ohio University Press.
2007b Urbanizing Mystical Islam: Making Murid Space in the Cities of Senegal. *The International Journal of Historical Studies* 40(2): 197-223.

Barnes, Shailly
2009 Religion, Social Capital and Development in the Sahel: The Niass Tijaniyya in Niger. *Journal of International Affairs* 62(2): 209-221.

Batran, Aziz A.
2001 *The Qadiriyya Brotherhood in West Africa and the Western Sahara: The Life and Times of Shaykh al-Mukhtar al-Kunti (1729-1811).* Institut des Études Africaines.

Bava, Sophie
2017 *Routes migratoires et itinéraires religieux des Sénégalais mourides entre Touba et Marseille*. Panafrika.

Boyd, Jean
1989 *The Caliph's Sister: Nana Asma'u 1793–1865, Teacher, Poet and Islamic Leader.* Frank Cass.

Boyd, Jean and Beverly B. Mack
2013 *Educating Muslim Women: The West African Legacy of Nana Asma'u 1793–1864.* Kube Publishing Limited.

Boyd, Jean and Beverly B. Mack (eds.)
1997 *Collected Works of Nana Asma'u: Daughter of Usman 'dan Fodiyo (1793–1864).* Michigan State University Press.

Brenner, Louis
2001 *Controlling Knowledge: Religion, Power, and Schooling in a West African Muslim Society*. Indiana University Press.

Brenner, Louis (ed.)
1993 *Muslim Identity and Social Change in Sub-Saharan Africa*. Indiana University Press.

Brigaglia, Andrea
2007 The Radio Kaduna Tafsīr (1978–1992) and the Construction of Public Images of Muslim Scholars in the Nigerian Media. *Journal for Islamic Studies* 27(1): 173-210.
2008 "We ain't coming to take people away": A Sufi Praise-song and the Representation of Police Forces in Northern Nigeria. *Annual Review of Islam in Africa* 10: 50-57.
2012 A Contribution to the History of the Wahhabi Da'wa in West Africa: The Career and the Murder of Shaykh Ja'far Mahmoud Adam (Daura, ca. 1961/1962–Kano 2007), *Islamic Africa* 3(1): 1-23.
2017 Sufi Poetry in Twentieth-Century Nigeria: A Khamariyya and a Ghazal by Shaykh Abū Bakr al-'Atīq (1909–1974). *Journal of Sufi Studies* 6: 190-232.
2018 Tarbiya and Gnosis in Hausa Islamic Verse: Al-Ṣābūn al-Muṭahhir by Muḥammad Balarabe of Shellen (Adamawa, Nigeria). *Die Welt des Islams* 58(3): 272-325.

Chih, Rachida
2019 Discussing the Sufism of the Early Modern Period: A New Historiographical Outlook on the Tariqa Muhammadiyya. In *Sufism East and West: Mystical Islam and Cross-Cultural Exchange in the Modern World*. Jamal Malik and Seed Zarrabi-Zadeh (eds.), pp. 104-127. Brill.

Cochrane, Laura L
2017 *Everyday Faith in Sufi Senegal.* Routledge.

Cruise O'Brien, Donal
1971 *The Mourides of Senegal: The Political and Economic Organization of an Islamic Brotherhood.* Oxford University Press.

Cruise O'Brien, Donal and Christian Coulon (eds.)
1988 *Charisma and Brotherhood in African Islam.* Clarendon Press.

Dassetto, Felice., Pierre-Joseph Laurent and Tasséré Ouedraogo
2013 *Un islam confrérique au Burkina Faso: Actualité et mémoire d'une branche de la Tijâniyya*. Karthala.

Dozon, Jean-Pierre
2010 Ceci n'est pas une confrérie: Les métamorphoses de la muridiyya au Sénégal. *Cahiers d'études africaines* 198-199-200: 857-879.

Dumbe, Yunus
2013 *Islamic Revivalism in Contemporary Ghana*. Södertörns Högskola.

Eguchi, Paul Kazuhisa
1975 Notes on the Arabic-Fulfulde Translational Reading in Northern Cameroon. *Kyoto University African Studies* 9: 177-250.

Fadil, Nadia and Mayanthi Fernando
2015 Rediscovering the "everyday" Muslim: Notes on an Anthropological Divide. *HAU: Journal of Ethnographic Theory 5*(2): 59-88.

Frede, Britta and Joseph Hill
2014 Introduction: En-gendering Islamic Authority in West Africa. *Islamic Africa* 5(2): 131-165.

Garfinkel, Harold
1967 *Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall.

Gellner, Ernest
1975 Ethnomethodology: The Re-Enchantment Industry or the Californian Way of Subjectivity. *Philosophy of the Social Sciences* 5: 431-450.

Genest, Serge et Renaud Santerre
1974 L'école franco-arabe au Nord-Cameroun. *Canadian Journal of African Studies / Revue Canadienne Des Études Africaines* 8(3): 589-605.

Glover, John
2007 *Sufism and Jihad in Modern Senegal: The Murid Order*. University of Rochester Press.

Gomez, Michael
2018 *African Dominion: A New History of Empire in Early and Medieval West Africa*. Princeton University Press.

Gomez-Perez, Muriel, LeBlanc, Marie-Nathalie, and Mathias Savadogo
2009 Young Men and Islam in the 1990s: Re-Thinking an Intergenerational Perspective. *Journal of Religion in Africa* 39(2): 186-218.

Hall, Bruce
2011 *A History of Race in Muslim West Africa, 1600–1960*. Cambridge University Press.

Harmon, Stephen
2014 *Terror and Insurgency in the Sahara Sahel Region: Corruption, Contraband, Jihad and the Mali War of 2012–2013*. Ashgate.

Hill, Joseph
2016 God's Name is not a Game: Performative Apologetics in Sufi Dhikr Performance in Senegal. *Journal for Islamic Studies* 35(1): 133-162.
2018 *Wrapping Authority: Women Islamic Leaders in a Sufi Movement in Dakar, Senegal*. University of Toronto Press.

Hiskett, Mervyn
1975 *A History of Hausa Islamic Verse*. SOAS.

Holder, Gilles (éd.)
2009 *L'islam, nouvel espace public en Afrique*. Karthala.

Holder, Gilles et Moussa Sow (éds.)
2014 *L'Afrique des laïcités: État, religion et pouvoirs au sud du Sahara*. IRD.

Hunwick, John.
1997 Towards a History of the Islamic Intellectual Tradition in West Africa down to the Nineteenth Century. *Journal for Islamic Studies* 17: 4-27.
2003 *Arabic Literature of Africa, vol. 4: The Writings of Western Sudanic Africa*. Brill.

Hunwick, John (trans.)
1999 *Timbuktu and the Songhay Empire: Al-Sa'di's Ta'rikh al-Sudan down to 1613 and Other Contemporary Documents*. Brill.

Janson, Marloes
2014 *Islam, Youth, and Modernity in the Gambia: The Tablighi Jama'at*. Cambridge University Press.
2017 Male Wives and Female Husbands: Reconfiguring Gender in the Tablighi Jama'at in the Gambia. *Journal of Religion in Africa* 46(2-3): 187-218.

Kane, Ousmane
2003 *Muslim Modernity in Postcolonial Nigeria: A Study of the Society for the Removal of Innovation and Reinstatement of Tradition*. Brill.
2016 *Beyond Timbuktu: An Intellectual History of Muslim West Africa*. Harvard University Press.

Kane, Ousmane (ed.)
1997 *Handlist of Manuscripts in the Libraries of Shaykh Serigne Mor Mbaye Cissé, al-Ḥājj Malick Sy and Shaykh Ibrāhīm Niasse*. al-Furqan Islamic Heritage Foundation.

Kobo, Ousman Murzik
2012 *Unveiling Modernity in Twentieth-Century West African Islamic Reforms*. Brill.
2015 Shifting Trajectories of Salafi/Ahl-Sunna Reformism in Ghana. *Islamic Africa* 6(1-2): 60-81.

Labordo, Cécile
1995 *La confrérie Layenne et les Lébou du Sénégal: Islam et culture traditionnelle en Afrique*. CEAN.

Larkin, Brian
2015 Binary Islam: Media and Religious Movements in Nigeria. In *New Media and Religious Transformations in Africa*. Rosalind Hackett and Benjamin Soares (eds.), pp. 63-81. Indiana University Press.

Launay, Robert
1997 Spirit Media: The Electronic Media and Islam among the Dyula of Northern Côte d'Ivoire. *Africa* 67(3): 441-453.

Launay, Robert (ed.)
2016 *Islamic Education in Africa: Writing Boards and Blackboards.* Indiana University Press.

Launay, Robert and Benjamin Soares
1999 The Formation of an 'Islamic Sphere' in French Colonial West Africa. *Economy and Society* 28(4): 497-519.

LeBlanc, Marie-Nathalie and Louis Gosselin (eds.)
2016 *Faith and Charity: Religion and Humanitarian Assistance in West Africa.* Pluto.

Levtzion, Nehemia and Randall Pouwels (eds.)
2000 *The History of Islam in Africa*. Ohio University Press.

Lô, Cheikh Tidiane
2018 Storytelling and Public Communication: Uses of Wolof Anecdotes in Cheikh Tidiane Sy's Religious Talk. *Western Folklore* 77(2): 171-200.

Loimeier, Roman
1997 *Islamic Reform and Political Change in Northern Nigeria*. Northwestern University Press.
1998 Cheikh Touré, un musulman sénégalais dans le siècle: du réformisme à l'islamisme. In *Islam et islamismes au sud du Sahara.* Ousmane Kane et Jean-Louis Triaud (éds.), pp. 155-168. Karthala.
2012 Boko Haram: The Development of a Militant Religious Movement in Nigeria. *Africa Spectrum* 47(2-3): 137-155.
2016 *Islamic Reform in Twentieth-Century Africa.* Edinburgh University Press.

Lydon, Ghislaine
2009 *On Trans-Saharan Trails: Islamic Law, Trade Networks, and Cross-Cultural Exchange in Nineteenth-Century Western Africa*. Cambridge University Press.

Mack, Beverly and Jean Boyd
2000 *One Woman's Jihad: Nana Asma'u, Scholar and Scribe*. Indiana University Press.

Mahmood, Saba
2005 *Politics of Piety: The Islamic Revival and the Feminist Subject*. Princeton University Press.

Masquelier, Adeline
1999 Debating Muslims, Disputed Practices: Struggles for the Realization of an Alternative Moral Order in Niger. In *Civil Society and the Political Imagination in Africa*. John Comaroff and Jean Comaroff (eds.), pp. 219-250. The University of Chicago Press.

McLaughlin, Fiona
1997 Islam and Popular Music in Senegal: The Emergence of a 'New Tradition'. *Africa* 67(4): 560-581.
2011 Youssou N'Dour's *Sant Yàlla/Egypt*: A Musical Experiment in Sufi Modernity. *Popular Music* 30(1): 71-87.

McLaughlin, Fiona and Babacar Mboup
2010 Mediation and the Performance of Religious Authority in Senegal. *Islamic Africa* 1(1): 39-61.

Monteil, Vincent
1966 Une confrérie musulmane : les Mourides du Sénégal. In *Esquisses Sénégalaises* (*Wâlo - Kayor - Dyolof - Mourides - Un visionnaire*). pp. 159-202. IFAN.
1980 *L'islam noir : une religion à la conquête de l'Afrique*. 3e éd. Éditions du Seuil.

Moore, Leslie
2006 Learning by Heart in Qur'anic and Public Schools in Northern Cameroon. *Social Analysis* 50(3): 109-126.
2008 Body, Text, and Talk in Maroua Fulbe Qur'anic Schooling. *Text & Talk* 28(5): 643-665.
2013 Qur'anic School Sermons as a Site for Sacred and Second Language Socialisation. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 34(5): 445-458.

Moraes Farias, Paulo Fernando de
2003 *Arabic Medieval Inscriptions from the Republic of Mali: Epigraphy, Chronicles and Songhay-Tuareg History.* Oxford University Press for The British Academy.

Mumin Meikal and Kees Versteegh (eds.)
2014 *The Arabic Scripts in Africa: Studies in the Use of a Writing System*. Brill.

Mustapha, Abdul Raufu (ed.)
2014 *Sects and Social Disorder: Muslim Identities and Conflict in Northern Nigeria.* James Currey.

Ngom, Fallou
2016 *Muslims beyond the Arab World: The Odyssey of ʻAjami and the Muridiyya.* Oxford University Press.

Ngom, Fallou and Alex Zito
2012 Sub-Saharan African Literature, ʻAjamī. In *Encycropaedia of Islam 3rd ed*. 2012(2), pp. 145-152. Brill.

Ngom, Fallou and Mustapha Kurfi
2017 ʻAjamization of Islam in Africa. *Islamic Africa* 8(1-2): 1-12.

Nobili, Mauro.
2018 New Reinventions of the Sahel: Reflections on the Ta'riḫ Genre in the Timbuktu Historiographical Production, Seventeenth to Twentieth Centuries. In *Landscapes, Sources and Intellectual Projects of the West African Past: Essays in Honour of Paulo Fernando de Moraes Farias*. Toby Green and Benedetta Rossi (eds.), pp. 201-219. Brill.

Nobili, Mauro and M. S. Mathee.
2015 Towards a New Study of the So-Called Tārīkh al-fattāsh. *History in Africa* 42: 37-73.

Nolte, Insa
2019 Introduction: Learning to be Muslim in West Africa. Islamic Engagements with Diversity and Difference. *Islamic Africa* 10(1-2): 11-25.

Otayek, René and Benjamin Soares
2007 Introduction: Islam and Muslim Politics in Africa. In *Islam and Muslim Politics in Africa*. Benjamin Soares and René Otayek (eds.), pp. 1-24. Palgrave Macmillan.

Philips, John Edward
2013 Islamic Publications in Nigeria. *Annual Review of Islam in Africa* 12(1): 92-101.

Radtke, Bernd
1995 Studies on Sources of the Kitāb Rimāḥ Ḥizb al-Raḥīm of al-Ḥājj ʻUmar. *Sudanic Africa* 6: 73-113.

Rebstock, Ulrich
2001 *Maurische Literaturgeschichte,* 3 vols. Ergon.

Rebstock, Ulrich (ed.)
2003 *Catalogue of Manuscripts in Ni'mah and Wallatah*. al-Furqan Islamic Heritage Foundation.

Reese, Scott
2014 Islam in Africa/Africans and Islam. *Journal of African History* 55(1): 17-26.

Riccio, Bruno
2004 Transnational Mouridism and the Afro-Muslim Critique of Italy. *Journal of Ethnic and Migration Studies* 30(5): 929-944.

Roberts, Allen and Mary Roberts
2003 *A Saint in the City: Sufi Arts of Urban Senegal.* University of California Museum of Cultural History

Robinson, David
2000 *Paths of Accommodation: Muslim Societies and French Colonial Authorities in Senegal and Mauritania, 1880–1920.* Ohio University Press.

Rosander, Eva Evers
1997 Introduction: The Islamization of "Tradition" and "Modernity." In *African Islam and Islam in Africa: Encounters between Sufis and Islamists.* Eva Evers Rosander and David Westerlund (eds.), pp. 1-27. Ohio University Press.

Ryan, Patrick J
2000 The Mystical Theology of Tijānī Sufism and Its Social Significance in West Africa. *Journal of Religion in Africa* 30(2): 208-224.

Sakaï, Shinzo
1994 Alfa Boari Karabenta de Dia. *Islam et sociétés au Sud du Sahara* 8: 67-84.

Santerre, Renaud.
1973 *Pédagogie musulmane d'Afrique noire: l'école coranique peule du Cameroun.* Presses de l'Université de Montréal.

Schielke, Samuli
2009 Being Good in Ramadan: Ambivalence, Fragmentation, and the Moral Self in the Lives of Young Egyptians. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 15: S24-S40.
2010 *Second Thoughts about the Anthropology of Islam, or How to Make Sense of Grand Schemes in Everyday Life.* Zentrum Moderner Orient Working Papers No.2.
2012 Capitalist Ethics and the Spirit of Islamization in Egypt. In *Ordinary Lives and Grand Schemes: An Anthropology of Everyday Religion.* Samuli Schielke and Liza Debevec (eds.), pp. 131-145. Berghahn Books.
2015 *Egypt in the Future Tense: Hope, Frustration, and Ambivalence before and after 2011.* Indiana University Press.

Schielke, Samuli and Liza Debevec
2012 Introduction. In *Ordinary Lives and Grand Schemes: An Anthropology of Everyday Religion.* Samuli Schielke and Liza Debevec (eds.), pp. 1-16. Berghahn Books.

Schulz, Dorothea E.
2012 *Muslims and New Media in West Africa: Pathways to God.* Indiana University Press.

Searing, James
2002 *"God Alone Is King": Islam and Emancipation in Senegal: The Wolof Kingdoms of Kajoor and Bawol, 1859–1914.* David Philip.

Seck, Mamarame
2013 *Narratives as Muslim Practice in Senegal.* Peter lang.

Seesemann, Rüdiger
2004 *Nach der "Flut": Ibrāhim Niasse (1900–1975), Sufik und Gesellschaft in Westafrika.* 2 vols. Universität Bayreuth.
2010 Sufism in West Africa. *Religion Compass* 4(10): 606-614.
2011 *The Divine Flood: Ibrahim Niasse and the Roots of a Twentieth-Century Sufi Revival.* Oxford University Press.
2015 Embodied Knowledge and The Walking Qur'an: Lessons for the Study of Islam and Africa. *Journal of Africana Religions* 3(2): 201-209.

Soares, Benjamin
2000 Notes on the Anthropological Study of Islam and Muslim Societies in Africa. *Culture and Religion* 1(2): 277-285.
2005 *Islam and the Prayer Economy: History and Authority in a Malian Town.* Edinburgh University Press.
2014 The Historiography of Islam in West Africa: An Anthropologist's View. *Journal of African History* 55(1): 27-36.

Soares, Benjamin and René Otayek (eds.)
2007 *Islam and Muslim Politics in Africa.* Palgrave MacMillan.

Soares, Benjamin and Filippo Osella
2009 Islam, Politics, Anthropology. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 15(1): S1-S23.

Sounaye, Abdoulaye
2015 Irwo Sunnance yan-no! 1: Youth Claiming, Contesting and Transforming Salafism. *Islamic Africa* 6(1-2): 82-108.

Stewart, Charles C. (ed.)
2016 *Arabic Literature of Africa. volume 5: The Writings of Mauritania and the Western Sahara, 2 vols.* Brill.

Syed, Amir
2017 *Al-Ḥajj 'Umar Tal and the Realm of the Written: Mastery, Mobility, and Islamic Authority in 19th Century West Africa.*

PhD dissertation, University of Michigan.

Taguem Fah, Gilbert L.
2000 Tendances actuelles de l'islam au Cameroun: état des lieux et perspectives. *Afrique contemporaine* 194(2): 53-66

Tamari, Tal
2002 Islamic Higher Education in West Africa: Some Examples from Mali. In *Islam in Africa: Yearbook of the Sociology of Islam, Vol. 4*. Georg Stauth and Thomas Bierschenk (eds.), pp. 91-128. Lit.
2009 The Role of National Languages in Mali's Modernising Islamic Schools (Madrasa). In *Languages and Education in Africa: A Comparative and Transdisciplinary Analysis*. Birgit Brock-Utne and Ingse Skattum (eds.), pp. 163-174. Symposium Books.
2018 Qur'anic Memorisation Schools in The Gambia: An Innovation in Islamic Education. In *Education for Life in Africa.* Anneke Breedveld and Jan Jansen (eds.), pp. 138-162. African Studies Centre Leiden.

Tamari, Tal and Dmitry Bondarev
2013 Introduction and Annotated Bibliography. *Journal of Qur'anic Studies* 15(3): 1-55.

Thurston, Alexander
2016 *Salafism in Nigeria: Islam, Preaching, and Politics.* Cambridge University Press.

Triaud, Jean-Louis
2014 Giving a Name to Islam South of the Sahara: An Adventure in Taxonomy. *Journal of African History* 55(1): 3-15.

Triaud, Jean-Louis et David Robinson (éds.)
2000 *La tijaniyya: une confrérie musulmane à la conquête de l'Afrique*. Karthala.

Umar, Muhammad Sani
1993 Changing Islamic Identity in Nigeria from the 1960s to the 1980s: From Sufism to Anti-Sufism. In *Muslim Identity and Social Change in Sub-Saharan Africa.* Louis Brenner (ed.), pp. 154-178. Indiana University Press.

van Santen, José C. M.
2010 'My "Veil" Does not Go with My Jeans': Veiling, Fundamentalism, Education and Women's Agency in Northern Cameroon. *Africa* 80(2): 275-300.

Villalón, Leonard A.
1995 *Islamic Society and State Power in Senegal: Disciples and Citizens in Fatick.* Cambridge University Press.

Ware, Rudolph T.
2014 *The Walking Qur'an: Islamic Education, Embodied Knowledge, and History in West Africa*. The University of North Carolina Press.

Ware, Rudolph, Zachary Wright and Amir Syed (eds. and trans.)
2018 *Jihad of the Pen: The Sufi Literature of West Africa*. The American University in Cairo Press.

Wright, Zachary
2010a Embodied Knowledge in West African Islam: Continuity and Change in the Gnostic Community of Shaykh Ibrahim Niasse. PhD dissertation, Northwestern University.
2010b The Kāshif al-ilbās of Shaykh Ibrāhīm Niasse: Analysis of the Text. *Islamic Africa* 1(1): 109-123.
2015a *Living Knowledge in West African Islam: The Sufi Community of Ibrāhīm Niasse.* Brill.
2015b *Pearls from the Flood: Select Insight of Shaykh al-Islam Ibrahim Niasse* (translated). Fayda Books.
2015c *On the Path of the Prophet: Shaykh Ahmad Tijani and the Tariqa Muhammadiyya.* Fayda Books.
2018 Secrets on the Muhammadan Way: Transmission of the Esoteric Sciences in 18th Century Scholarly Networks. *Islamic Africa* 9(1): 77-105.

Zappa, Francesco
2009 Popularizing Islamic Knowledge through Oral Epic: A Malian Bard in a Media Age. *Die Welt des Islams* 49: 367-397.
2015 Between Standardization and Pluralism: The Islamic Printing Market and Its

Social Spaces in Bamako, Mali. In *New Media and Religious Transformations in Africa*. Rosalind Hackett and Benjamin Soares (eds.), pp. 39-62. Indiana University Press.

Zito, Alex
2012 *Prosperity and Purpose, Today and Tomorrow: Shaykh Ahmadou Bamba and Discourses of Work and Salvation in the Muridiyya Sufi Order of Senegal.* PhD dissertation, Boston University.

『年報人類学研究』第11号（2020）
Annual Papers of the Anthropological Institute Vol.11 (2020)

New Trends on the Studies of Islam in West Africa:
Sufi Orders, Islamic Thought, and Discursive Tradition

Seiji NAKAO[*1]
Tomoki IKEBE[*2]
Takanori SUENO[*3]
Sohta HIRAYAMA[*4]

This paper presents an overview of new study trends and directions that have emerged since the 2000s regarding the study of Islam in West Africa. After outlining the new trends, we discuss three topics: the study of the Sufi brotherhoods in West Africa, the study of the history and philosophy of Islam in West Africa that is based on Arabic manuscripts, and the theoretical study of the Anthropology of Islam as a discursive tradition. The results of previous research conducted up to and during the 1990s did not emerge until the early 2000s. As well, since 2005, the main focus of anthropological studies has been Islamic education and the public perception of Islam. In contrast, there has been a considerable rise in research related to the historical development of Islam and Islamic philosophy, particularly on Arabic manuscripts. We present the integration of these fields through critically reconstructing the concept of "discursive tradition" through explicating relevant ethnomethodological options. This occurs within a larger interdisciplinary context related to anthropology, linguistics, the history of Islam, and the history of Islamic philosophy.

Keywords:
West Africa, Islam, Anthropology of Islam, discursive tradition, 'Ajami

[*1]Research Institute for Humanity and Nature
[*2]Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University
[*3]Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University
[*4]Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University